

3年2組

 「命をいただく」ということを考え生きていくわたし
 ～命を削って生んだ卵をいただくということ～


卵と出会ってからの160日間

夏休み明けには見違えるように大きくなった2組のひよこ。鳴き声はすでに「ピョピョ」ではなく「コッココッ」と言った聞きなれた鶏の声に近づいていました。「雄の鳴き声は、大きいからもし『コケコッコー』と鳴きだして、迷惑になったらどうしよう」と不安を感じる子ども達でした。



そして、迎えた9月。ついに雄の鶏が鳴き始めたのです。その鳴き声に思わず拍手をする子ども達。けたたましく鳴く雄の鶏ですが生まれた瞬間から目にしている鶏が全身を使って鳴く様子を間近で感じ、成長を実感したり、思った以上の美しい声に感動したりしました。

10月には、「ひよこ・にわとりとの160日間を振り返ろう」という授業を行いました。

「5月19日」という日を出すだけで、「あっ！」と何かに気づく子ども達。「孵卵器に卵を入れた日だ」という発言を聞き、なんだか懐かしそうに写真を見つめます。その当時の「お父さんとして、えさや水やりができるか心配」「20+38の命が教室にあると思うとドキドキする」といった子どもたちの振り返りやつぶやきを紹介すると、あの卵と出会った時の記憶が蘇ってくるようでした。

「6月8日」は最初のひよこが生まれた日。みんなで映像を見ると、あの興奮を思い出します。生まれて1週間までは、手のひらほどのサイズだったひよこ。今の鶏たちと比べながら、見つめる子ども達。最初の観察記録では「体長10cm、体重50g」と記されており、Aさんは、思わず「今は400倍になったってこと！」と驚きを隠せない様子でした。6月、7月・・・と写真や映像とともにひよこ達の成長を振り返っていくと、その時に感じた感想とはまた違った思いが生まれてきます。6月に見ていたひよこは可愛さや命の尊さを感じましたが、こうやって振り返ることで、生命の不思議さやたくましさ、成長していることへの喜びを感じます。7月の小屋のリフォームは、1匹行方不明になった雄の「つばさ」の分も命を大事にしようとして必死に小屋をつくりましたが、その小屋のおかげで、鶏たちがすくすく育ったことにやりがいを感じます。160日間のひよこの歩みをまとめた「ひよこ年表」を見ながら、当時のことを振り返ると、また新たな視点でひよこの成長を見つめることができる時間となりました。

振り返った後は、3人1組でジャムボードに印象に残ったことを中心にまとめていきました。

Bさんは、「検卵をしている動画を見たとき、生きているのかよく分からなかったらすごく心配だった」「新しい家族が生まれたようでとても嬉しかったです」と書き、卵から生まれるまでの不安な気持ち、そして誕生した嬉しさを「家族の誕生」と捉え、改めてひよこの出会いの日々を振り返っていました。Cさんは、「陽向(ひなた)が『コケコッコー』と鳴いた鳴き声を聞くと成長したと感じた」と振り返っており、周りの迷惑になるか不安だった雄の鳴き声も、実際に聞いてみると、その美しさやピョピョからけたたましく鳴くようになったことで成長を感じたようでした。



ひよこ年表を振り返ってDさんが綴った記録です。

にわとりになってから一日一日少しずつ重くなりました。陽向も最近「コケッコー」と鳴くようになりました。「もうりっぱなにわとりだね」と心から思いました。ここまでのことをふりかえっていたら、最初はかわいいなとかしか思っていなかったけど、命の大切さを知って、「可愛いだけじゃない」と思いました。これから後期は可愛いだけではなく、「命」を大切ににわとりと成長していきたいです。

こうして、これまでの160日間を見ると、目の前のひよこの可愛さを感じ、日々成長するひよこ達のために尽くしてきた毎日でした。しかし、俯瞰してみると、そこには生命の成長の早さ、愛おしい命の存在、そしてこれからも続いていく自分達の責任がある鶏との生活が見えてきます。

Eさんは、「私は今まで鶏と過ごした日々を振り返ると、命を感じた日々だったと思います」と振り返っていました。私たちの周りには「命」がありふれています。自分の命、友達の命、かかわっている人すべてに命があります。また、我々は、命をいただいています。野菜、魚、肉・・・「命」を感じるとはこうした周りのものの見方が変わってきている表れであると感じます。命が感じられるからこそ、命を大切にできます。命が感じられるからこそ、命に感謝しながらいただけます。2組のにわとり達の生む卵。我々が命をいただいていることの意味をこれからも考えていきたいです。

卵から感じる命

ついに待ち望んでいた瞬間がやってきました。卵と出会ってから約200日。まさかの担当が1日出張している日。お昼過ぎに、産卵箱に卵が生まれているのをFさんが発見しました。

Fさんによると、掃除のために小屋に近づいていったところ、産卵箱から1羽飛び出してきてきたそうです。箱の中を見ると、そこにあったのは茶褐色の1つの卵。驚いたFさんは、大声で3年2組のみんなを呼び、辺りは騒然となったそうです。

出張から帰ってきた私に「卵生まれたよ」「なんで、先生いなかったの？大変だったんだよ」「たぶん命花(めいか)が生んだんだよ」と矢継ぎ早に報告してくれる子ども達。本当は子ども達と初めての卵を発見した瞬間を共有したかったのですが、子ども達の興奮気味に次から次へとその日の出来事を語る姿から、卵が生まれた感動が伝わってきました。

卵の第1発見者Fさんは、発見時の様子を教えてくれるのと同時に、その後は、みんなが鶏を散歩している間に、砂浴び用の砂をずっときれいにしていました。その行動からは、実際に卵を目にし、卵に働きかけられて、卵を頑張る産んだ鶏のために自分にできることは何なのか考え、思わず動き出しているように感じました。

実際の卵を見ると、そこには血がついています。手に取ると、ほんのり温もりがある卵。まさに鶏が命を削って卵を産んだことが、五感を通じて伝わってきます。

Gさんは、日記に「鶏は、卵を産んで、⇒卵からひよこが生まれる⇒また鶏になって、卵を産む…それは、人間や、2年生の頃に育てた藍と一緒にどんどん命を増やしたり、繋がったりしていることに、気が付きました」と書いており、「命」をキーワードにこれまでの経験を想起しているようでした。同時に「この卵どうするの」という切実な問題を口に出す子どももいました。

翌日、命花が生んだ卵を目の前にして子ども達は様々なことを話し合いました。雄と飼っているため、有精卵か無精卵かは分かりません。子ども達は見えない卵の中について思いをもって考えています。「命花が命を削って生んでくれた卵だからよく考えなきゃダメ」、「無精卵か有精卵か分からないけど、割ったら元に戻せないからどうしよう」。子ども達は鶏との今まで歩みを振り返りながら、今後卵をどうしていけばいいか意見を出していきます。

大きく分かれたのは「食べる」と「孵卵器に入れる」です。Hさんは、「鶏は家畜だし、他の鶏は肉になったり、卵を生んだりしているから食べてあげることが大事」と改めて、家畜としての鶏として考えていました。Iさんは、「孵卵器に入れて生まれて来なかったら無駄になっちゃうし、スーパーで生まれてくる卵



と比べてみたい」と卵を1つの食材として見ていました。Jさんは、「正直迷っているけど、動物だって子どもも増やしたいと思って産んでいるんだから、ぼくたちに、卵を取る権利があるのかな」と卵の中の命と自分自身の在り方を見つめていました。4年生までは、残り4か月。この残された時間で何を選択するか迫られています。この日の話し合いでは決着がつかなかったのですが、「早く決めないと選択肢自体が減ってってしまう」つぶやくKさん。卵が生まれたと同時に自分たちの手で誕生させた「卵」に対しての責任を感じているようでした。

今までも話し合ってきた卵をどうするかという問題。実際に目の前に卵があると、その切実感より具体的になってきました。

鶏が命を削って産んだ卵を

いただくということ

3年2組の鶏たちが、卵を産み始めて2週間。最初は1羽だけだったのが、安定して3羽が毎日卵を産むようになりました。殻の色、大きさ、形、どれをとっても違いがあり、しさんは「1つ1つ卵には個性がある」と観察記録に綴っていました。

そんな卵も賞味期限は2週間です。食べる、食べないという話し合いを幾度も重ね、「ペットじゃなくて家畜だから食べたほうがいい」「このままでは無駄になってしまう」という意見が多数あり、食べる食べないは個々が選択することでみんなで合意し、担任が料理することになりました。

まずは、じっくり観察です。今まで集めておいた卵のうち20個を割りました。卵の中身が出てくるたびに、「うわあ、きれい」「めっちゃめっちゃきれいなんだけど」とその美しさに感動した子ども達から声が上がります。中には、血が混じっているのもあり、自分達の手で育てた鶏からいただいたものであるからこそその発見がありました。

殻は担任が割ったのですが、1つ1つの殻の硬さも違いました。「あの卵は天音（あまね）のだ」と言いながら、産んだ鶏を思い浮かべて卵を見つめるMさん。「黄身の形が1つ1つ違うし、色も違う」というNさん。それぞれの子どもが、卵の中身を見つめながら今までを振り返ったり、新たな発見をしたりしていました。

スーパーマーケットで売っている卵も同時に観察し違いもつけていました。「スーパーの方が黄身が濃い感じがする」「自分達の卵の白身の方が水っぽいみたい」「僕たちの育てた卵は少し匂いがするよ」と次々に発見したことを口にしていました。改めて、卵の中身を見ることで、今までも卵を目にしてきた子ども達ですが、卵について新たな発見をしているようでした。

Oさんはこの日の日記に次のように綴っていました。

こうして卵を産んでくれて普通に食べていることは当たり前前に食べちゃいけないと思います。まだ今でもこのようにまんぞくしてご飯を食べられていない人もいますし、だから大切に食べなきゃいけないと思いました。ご飯は当たり前前に食べちゃいけないということを鶏は教えてくれたと思います。卵をいただくことは当たり前じゃないということをわすれずにいたいです。一個の卵をいただくというのはすごくきちょうなことだと思いました。鶏たちはいのちをけずって産んでくれた卵を大切にしたいです。

当たり前前に感じている自分自身をもう一度見つめ直している姿であると感じました。Pさんも、「ぼくは食卓に出てくると、なんで『ありがとう』などと思わないのかとても不思議でした。それは、鶏だけじゃなくてぼくが食べているもの全部の話だと思います。なんで『ありがとう』と思わないのかはぼくの心に聞いてみたいと思いました」と、卵をきっかけに自分自身が食べているもの全てに命があること、我々人間は命をいただいて生きていることを考え始めていました。



「いただきます」に込められた意味

自分達の育てた鶏からいただく卵。卵との出会い直しをした子ども達は、改めて食べ物をいただくことについて考え始めました。Qさんの「いただきますってどういう意味なのかみんな考えてい」という思い。そこで、道徳で「いただきます」の意味について考える授業を行いました。

「いただきます」には、「調理してくれた人への感謝」「生産者の方への感謝」が込められていると語る子ども達。そこで、私のお気に入りの本である、「命はどうして大切な」という本を紹介しました。

本の中には私たちが食べているものは、他の動物・植物の命であること、本来動物は他の動物の命をいただくものであるが、人間は人間のためだけに命を育てて食べているということ、人は自分で命を取り上げなくても誰かが命を取り上げたものを食べているから、命をいただいていることを忘れてしまうことがあると紹介されています。「いただきます」とは他の命をいただいているということ・・・この本を読んだ子ども達は改めて「いただきます」の意味について考え始めました。Rさんは、「最初はいただきますって何のために言っているか分からなかったけど、命とつながる言葉なんだ」といただきますの意味を捉え直していました。Sさんはこの本を読んだ感想に「命がバトンタッチしている」と綴っていました。私たちがいただいている命も何かの命をいただいて大きくなったのかもしれない・・・そんなことに思いを馳せると、いただきますの意味をより深く考えているようでした。今までも、これからも何度も口にしていこう「いただきます」という言葉。ただの飾りの言葉でなく、命を感じながら、目の前の食べ物に感謝して使っていきたいと感じた時間になりました。

Tさんの日記より「命の大切さを私達に教えてくれた鶏たち」

「気づいたら、私の方が鶏に色々な事を学ばせてもらったな。鶏は、私に色々なことを教えてくれたな」今、メスの鶏たちは卵を産んでいます。私は、私達が飼っている鶏の卵を食べるときは、「ありがとう」と思って卵を食べました。だけど、スーパーマーケットに売っている普通の卵は、感謝の気持ちもなく、普通に食べていました。だけど、同じ鶏が産んだ卵でも、どうして感謝の気持ちをもって食べる卵と、普通に感謝の気持ちもなく食べる卵があるのかな」と思いました。私は、鶏が卵を産んでいるのを見たときに、すごく大変そうだったし、今自分が持っているパワーを卵に集めて頑張ろうとして、命を削って産んでいました。一生懸命産んでくれていました。私は頑張って卵を産んでくれる鶏の姿をみたときに、「こんなに頑張って、命をかけて産んでくれていたんだ」「ありがとうの気持ちをもって卵を食べないとな」と思いました。それからは、毎日卵を食べるときは、ありがとうと思って食べるようになりました。今まで何も感じずに食べていた卵。その中には、色々大変な思いをしている鶏がいて、そしてやっと私の手に入っているものだから、そのたった一つの卵でも、その一つ一つに感謝の気持ちをもって食べていきたいです。そういう命の大切さを鶏は、私達に伝えたかったのだと思います。

子ども達が持ち帰った卵はお家でおいしくいただいています

